
異世界対応マニュアル！

佐藤 和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界対応マニュアル！

【Nコード】

N8517N

【作者名】

佐藤 和樹

【あらすじ】

突然異世界トリップしたさえない研究員黒崎誠。しかし、彼の手元にはそんな時のための心強い味方があった！

プロローグ（前書き）

あらかじめ揭示しておきますが、この作品の更新は不定期です。その点をご了承下さい。

ブローグ

ブローグ

「どうしよ、明日までにはとても終わんないぞ」

西暦三一一二年。次元宇宙研究所と呼ばれる研究所。そこで一人の男が唸っていた。男の名前は黒崎誠、この研究所の平研究員だ。今、彼の目の前にある空間ディスプレイには大量のソフトが表示されていた。明日までに彼が処理しなくてはならないソフトである。このソフトたちが彼を唸らせていた原因だった。

「これ終わらせないと主任切れるからなあ、でも終わらないよな、これ」

誠は仕事の量に絶望してため息をつく。彼の小さな研究室をどんよりとした空気が覆った。

「現実から逃げたらいいのに……はあ」

誠が現実逃避に走り、二度目のため息をついた。そしてコーヒーを一口すすり、現実に戻る。彼が困った時にするいつもの行動パターンだ。

彼がコーヒークップを置いたその時、研究所内にサイレンが鳴り、放送が流れ始めた。

「職員の皆様にお知らせします。ただ今研究所内の次元が大変不安定となっております。つきましては避難場所への方をよろしくお願

い致します。繰り返します……」

「マジか。こんな時にかよ。俺もついてないな」

誠は放送内容に悪態をついた。なにせ、これで彼の仕事が間に合う可能性がほぼ無しになってしまったのだから。しかし、なってしまったものは仕方がない。誠は荷物をまとめて避難場所に行く準備をする。

「主任にどうやって謝ろうか。あの人ヒステリックだから……」

誠は仕事を間に合わせることを潔く諦めた。さらに上司に謝る算段をつけはじめる。

彼はそうして上司に対する言い訳を考えながら、研究室のドアを開けた。研究室の今時珍しい木製のドアが誠の手でなめらかに開かれる。

「あれ、どこだここ……」

ドアを開けた誠の目の前には深い森林が広がっていた。木々が生い茂り、小鳥の鳴き声なども聞こえる。今時地球のどんな奥地にもこんな場所はない。もちろん研究所の中にこんな場所はない。誠は後ろを振り返った。研究室や研究所の影も形もない。ただ前と同じ森が広がっているだけだった。誠はあまりに突然の出来事に言葉を失う。しかしすぐに比較的冷静に戻った。

「まさか俺がトリップすることになるとは……」

誠はすぐに思い当たる現象があったのだ。

異世界トリップ。一般的にはありえないとされる出来事だろう。

しかし彼の所属する研究所では滅多にないが、ありえないこともなかった。

彼はしばらく思考を停止させた後で、手に持っていたかばんから端末を取り出した。ちなみに彼の持つているかばんはたくさんものが入る無限量かばんだ。

「マニュアルが確かあったよ……。あっこれだこれだ」

誠は端末の膨大なデータの中からあるマニュアルのデータを選び出した。彼の研究所はあらかじめこういう場合に備えてマニュアルを用意しているのだ。

誠はそのマニュアルを見るべく端末の画面を切り替えた。「画面に異世界対応マニュアルという文字がデカデカと表示された……」。

プロローグ（後書き）

感想・評価をお願いします。

第一話 異世界初の出会い（前書き）

連日投稿できました！

第一話 異世界初の出会い

「異世界で初めて起こること。それは美少女との出会いだろう」

異世界トリップ経験者の証言より

第一話 異世界初の出会い

マニユアルを開いた誠はさすがのような思いで読み始めた。マニユアルには次のように書かれていた。

『目次』

- 1、異世界でまずはじめにすべきこと
- 2、こういつ時どうするか？ Q & A
- 3、異世界で役立つ現代知識集
- 4、経験者は語る先輩トリッパー体験談『

いろいろ目次に書いてあったが、とりあえず誠は『1、異世界でまずはじめにすべきこと』を読むことにした。

『まずはじめに異世界では落ち着きが大切です。精神をできるだけ落ち着かせましょう。ただし、深呼吸は有毒ガスを吸う恐れがあるので厳禁！』

誠はそこまで読むと、地面の上に座り込んだ。そして何も考えずに頭を真っ白にする。森林浴の効果もあったのか、誠はすぐに落ち着くことができた。落ち着けたところで、誠はマニュアルの続きを読む。

『次に、周囲の状況確認です。足元に気をつけて散策してみましよう。周りに長い棒などがあれば、それを杖のように使うと良いです』

誠は周囲を見回した。そして目の前に落ちていた木の枝を拾う。その長さはちょうど誠の身長半分ほどあった。それをマニュアル通り、杖の代わりにして一步一步慎重に辺りを散策する。

「すごく普通の森だ」

誠はしばらくしたところで思わず言った。時々派手な原色系のキノコとかあるが、地球の森とほとんど変わらない。

誠は異世界の森に安心したような、がっかりしたような複雑な気分になった。そしてなんだか気疲れしたので、岩に腰掛け休憩する。

「何だ、何か起きてるのか？」

誠が一息ついていると、遠くから悲鳴のような声が聞こえた。何事だろうかと誠は慌てて聞き耳を立てる。また悲鳴が聞こえた。誠から見て東の方角だ。誠は誰か襲われているかもしれないと思った。そこで誠はその誰かを助けるべく、着ていた白衣のポケットに石をぎっしり詰め込んだ。そして悲鳴の聞こえた方向に向かって走り出す。少しの間、足場の悪い森の中を懸命に走ったところで、誠は森の中の木々が生えていない広場のような場所についた。その

場所で、狼のような生物と少女が対峙していた。多分、少女が悲鳴をあげたのだろう。

「あれは狼なのか……。育ち過ぎだろ！」

誠は狼らしき生物を見て叫んだ。その生物は狼のような姿をしていたが、バスぐらいの大きさがあったのだ。

「兄ちゃん危ないで！ 私のことはええから早く逃げや！」

大昔の中東風の服を着た少女がなんと関西弁らしき言語で話し掛けてきた。驚きのあまり誠は口をあんどりと開く。

「兄ちゃん何しとるんや！ 逃げんと食われてまうで！」

少女は動きが止まっている誠に向かって再度叫ぶ。少女の声で誠は正気に戻った。

「俺が逃げたら君が食われるんじゃないのか？」

少女は短剣のような武器を構えていたが、素人であることが同じく素人の誠でも見てとれた。

「兄ちゃんだけでも逃げるんや。私のことはもうしゃあない」

少女はきっぱりと言い切った。誠はその言葉に頭を抱える。実は、誠の身体能力は非常に高い。それは宇宙時代、様々な星で暮らすため人類全体に遺伝子改良が為された結果だ。

だから、あのでかい狼にも全く勝てないという訳ではない。かなり確率は低いが勝てるかもしれないのだ。

誠が戦うのか逃げるのか迷っている間にも、狼は少女を喰らわんと唸りを上げた。

「やっぱり見捨てるわけにはいかない！ 助けるぞ！」

誠は戦う決意を固めた。石を手にとって、狼の鼻の辺りを狙い投げる。ヒュンと風を切る音がして石が狼の鼻に直撃した。狼の鼻に石がめり込み、おびただしい量の鼻血が噴き出す。

「キャイン！ キャイン！」

痛みに耐えかねた狼は負け犬のような情けない吠え方をして、森の奥に逃げていった。

「兄ちゃんどんな身体の構造しとるんや！ ありえんで！」

少女は誠の非常識な力に呆れたように叫ぶ。しかしもっと驚いていたのは誠の方だった。

「俺だつて驚いてる。この間の健康診断は全部正常だったのに！」

自らに突然超人的なパワーが湧いた誠は混乱し始める。そこへ少女が近づいてきた。少女は誠の身体を興味深そうに触り始める。

「筋肉は意外とないね……。魔力で強化しとるんかな？」

少女は誠の身体を触りながらぶつぶつとつぶやく。誠は少女の様子に驚いて飛びのいた。

「いきなり触るな！ もっと人のことを考えてくれ」

誠はそういつと少女に少しきつい顔をした。少女は頬を膨らませた。

「ケチやなあ、少しぐらいええやないの」

「ケチじゃない、君だって俺にもし触られたとしたら嫌だろう?」

誠は説教するように言った。誠がそういつと、少女は身を小さくしてつぶやいた。

「もしかして触りたいんか? ダメやで、こんな森の中なんやから」

少女はそういつとイヤイヤと身をよじる。そんな少女の悪ふざけに誠はやれやれと思った。しかし、すぐに気を取り直すと少女に頼みごとをする。

「それはまあいいとして……。すまないが、俺も一緒に町まで連れて行ってくれないか?」

誠の頼みに少女は顔をほころばして笑った。

「もちろんええよ。うちの方から頼もうかなって思ってたところや。ウチは商人やつてるミラ、よろしくな!」

誠はミラの好意に感謝しながら自己紹介をした。

「俺は黒崎誠、誠って呼んでくれ」

ミラはぶつぶつと名前を覚えるためにクロサキマコトと何回も唱

える。

「マコトやな、ちゃんと覚えたよ。そんなら行こうか。急がんと町に着く前に日が暮れるから」

ミラは傾いてきた太陽を指差した。そして早速出発しようとする。

「待つてくれないか、向こうに荷物があるんだ」

誠はかばんを置いた岩の方を指で示した。かばんの中には大切なマニユアルの入った端末もある。絶対に取りに戻らなければならなかった。

「なら私はここで待つてるから、早う取つて来て」

ミラはそういうと背中に背負っていたリュックのようなものを降ろした。誠はそれを見るとすぐに駆け出した。

「えらい早かったね。行こうか」

誠は尋常でない速さで行つて帰つてきた。道に慣れたのもあるが、それ以上に謎パワーに目覚めたのが大きいだろう。

町についたらマニユアルをすっかり読まないとな、と誠は思った。そう思っている間にも誠とミラは町に向かって進んでいた。

第一話 異世界初の出会い（後書き）

感想・評価をお願いします。

第二話 この世界での目標（前書き）

マニュアルの出番が……。これから要所要所にできるように工夫します！

第二話 この世界での目標

「異世界の仕事は商人と冒険者しかないのだろうか」

異世界トリッパー研究家の証言より

誠とミラは森を抜けて街の前に来ていた。誠たちの目の前には巨大な門がそびえていた。さらにどっしりと重厚な造りの塀が街の周りをぐるりと取り囲んでいる。外敵に備えてだろう。塀の外からでも建物の屋根などが見える。かなり大きな街のようだ。

「どうや、立派やろ！ここがこの辺りで一番栄えてるアールやで！」

ミラが誠に向かって自慢げに言う。しかし誠はその間にもマニュアルに目を通していた。

「ふむふむ、なるほどなるほど……」

ミラの額に血管が浮き出た。さらに形の良い眉が吊り上がる。

「こらマコト！ 無視するな！ まったく……こんな美少女が話してるんやからしっかり聞きや」

ミラは呆れたように言うため息をついた。誠は慌ててミラの方を見る。ミラはムスツとして頬を膨らませていた。その姿は自ら美少女というだけあって、褐色の肌に燃えるような赤髪が美しい。

「ごめん、これを見てたんだ」

誠は端末を指差した。ちなみに端末は一見ただけではメモ帳にしか見えない形をしている。

「私にもその本見せて！」

ミラは興味津々といった感じで誠の端末を見た。そのあとミラは誠の目をみつめる。誠はミラの純真な瞳からさりげなく目を逸らした。

「文字が違うから読めないよ」

「それでもいいからちよつとだけ！」

ミラは誠の端末に手を伸ばした。誠は端末を閉じて手を上に上げる。背の低いミラは端末にまったく手が届かない。そこでミラはピョンピョンと何度もジャンプする。それでも手は届かない。ミラは恨めしそうに誠を見た。だがすぐに、何か思いついたのか、からかうような口調で話し始めた。

「ははーん、さてはそれエロ本やな？ だからウチには見せられないんや。マコトも男やし、しょうがないと思う。けど昼間からはちよつとと思うで」

ミラはそう言って横目で誠を見た。ここで誠が否定したら、本当なのか確かめるといつて端末を取り上げるつもりなのだ。まず間違いないく誠は否定して端末を見せるだろうとミラは踏んでいた。だが端末を見せられない誠は沈黙する。

「マコト、エッチやで！」

沈黙する誠にミラはからかうように言い放つ。そして軽やかに走って門をくぐっていった。誠もそのあとを追いかける。

門の向こうには活気のある町並みが広がっていた。狭い道をたくさんの人々が行き交っている。その道の両側に商店が連なっていた。

ミラはそんな大通りから一步奥に入り、路地を歩く。そして『ミラ雑貨』と看板の掲げられた店の中に入って行った。誠も続いて店の中に入っていく。店の中はさまざまな物が小綺麗に並べられていた。ミラは雑貨屋を営んでいるようだ。

「ここがミラの店か」

誠はたくさんの商品が整然と並べられた店に感心したように言った。それを聞いたミラは大きく胸を張る。

「そう、ここがウチの店、ミラ雑貨や。結構立派やろ？」

そういうと、ミラはカウンターの中に背中荷物を降ろした。そしてカウンターの中から手招きする。誠はミラの招きに従いカウンターの中に入った。

「この階段の上が家になってる。ついてきて。ただ足元には気を付けや」

ミラは階段をきしきし言わせながら昇る。誠は古びた階段に不安を感じながらも昇った。

「あちゃー！ しばらくいなかったから埃が積もっとる！」

ミラは埃の積もった廊下を見て、やってしまったとばかりに叫ぶ。そして申し訳なさそうに誠を見た。

「いいよ、気にしてないから」

「ありがとな、ウチも家がこんな汚れとるとは思わなかったんや」

ミラは相当長い間家を空けていたようだ。遠くに仕入れにでも行っていたのだろう。

元氣になったミラは廊下の脇のドアをゆっくり開けた。これまた古いドアは立てつけが悪いのか、嫌な音を立てて開く。ドアの向この部屋の中にはテーブルと椅子が置かれていた。両方ともシンブルなデザインで木目が美しい。それらは小さな窓から入る光を反射して、光っていた。

「さあ座って座って」

ミラは埃を手で払うと誠に椅子に座るように促した。

「どうもありがとう」

誠は素直に席に着く。するとミラが飲み物を運んできた。コーヒーに似た臭いが漂う。

「最近仕入れた飲み物や。コブって言うんだけど飲んでみ」

ミラもそういつて席に着く。誠はコブをわずかずつゆっくりと飲んだ。マニユアルにこう書いてあったからである。

『異世界の飲み物、食べ物には気をつけましょう。地球人類には危険な物質が混じっている可能性があります。ですので少量ずつ、できるだけゆっくり食べましょう』

とりあえず誠はこの指示に従ったが、コブは臭いの通りコーヒーに近い味でおいしかった。

「さてと落ち着いたところで話を聞いてもいいかな。さっきからマコトの格好とか気になってたんやけど……」

ミラは話を切り出した。誠はマニュアルを読んで考えておいた答えを返す。

「俺はここから遠い山奥の村の出身なんだけど、今年はひどい飢饉でね。だから街に出てきたんだ。それで、この服とかは俺の村では一般的な服なんだ」

誠が迫真の演技で悲しい顔をする。ミラは胡散臭そうな顔をしたが、誠があまりにも悲しそうに見せるのでだまされてしまった。

「そうやったんか……。ならウチの店で働かない？ 恩もあるし、ちようど人を雇いたいと思ってたところなんよ」

誠にとって願ってもない話だった。なので即答する。

「もちろん！」

誠の答えにミラは嬉しそうに笑い、別の部屋からワインのボトルのようなビンを持ってきた。そしてグラスも用意し、ワインらしき物を注ぐ。

「よし、マコトも飲み！ それじゃあミラ雑貨に乾杯！ 二人で世界一の店にしような！」

誠とミラはグラスを打ち鳴らした。心地好い金属的な音がする。こうして誠とミラの日常が始まったのだった。

第二話 この世界での目標（後書き）

感想・評価をお願いします！

第三話 商売を考えよう

「異世界で商売するときは塩、香辛料、氷菓がオススメだ。ほぼ間違いない成功できる」

元異世界の商人より

第三話 商売を考えよう

誠はミラの家のベッドの上でこれからのこと考え込んでいた。ミラはすでに酒に酔って寝てしまっている。

「救助が来るまで平均五年かあ……。それまで何とかしないとな」

誠はマニュアルに書かれていた文字に思わず唸った。異世界へ救助隊が来るまでには平均五年かかると書いてあったのである。つまり彼は五年もの間この世界で過ごさねばならないのだ。

「時間もあるし、ここは本気でミラと商売するのでしょうか」

誠は素早く端末を操作した。そしてマニュアルの『異世界で役立つ現代知識集』を表示する。

誠は表示された文字を食い入るように読み始めた。そうしてしばらく時間が流れる。

「ふふふ、これで儲かる！ 完璧だ！」

誠は頭の中で画期的な商売を思いついた。そして魔王のような高笑いをすると思気揚々とベッドに潜る。

翌日、爽やかに目覚めた誠はミラに喜び勇んで『おれのかんがえ
たすごいしょうばい』のアイデアを披露した。だが……

「そんなことみんな思いついてるよ。ただ実現が難しいからやらな
いだけで」

「な、何だと……。この世界の商人はSYOUNINだったのか……
…！」

誠は絶望感に打ちのめされた。しかし考えて見れば当然である。
この世界に来て間もない誠が画期的な商売なんて思いつける訳がな
かったのだ。

「で、でも素人にしてはなかなかの発想やで。誠って賢いな、あは
は……」

あまりにも落ち込んだ誠をミラは見かねて、無理にそのアイデ
アを褒める。なんとも白々しい声がまだ客のいない店内に響いた。
しかしそのことが誠の闘志に火をつけた。

「やってやる、やってやるぞ。絶対画期的な商売を見つけてやる！
そうと決まったらまずはリサーチだ！」

「待った！ まだ何も仕事してないで！」

ミラが店から飛び出す誠を慌てて止めようとした。だが誠の耳
には入っていないようで、そのまま誠は街に繰り出してしまった。

「街のこととか何も知らんのに飛び出してもうた。全く、どうなっ
ても知らんで……」

ミラは呆れたように言うと開店準備を開始した。

その頃、誠は早速困っていた。街の店が何を売っているのか調べようと看板を見たのだが、何故か文字は読めたのだが、名詞の意味がわからないのだ。おかげで調査がまったくはかどらない。

「なんでこんな中途半端にご都合主義なんだ。名詞の意味までわかればいいのに。何だよ、エラト販売中って。さっぱりわからないな」

誠はルー〇柴が書いたみたいに見える看板を解読することをあきらめた。しかたないのでミラの店に戻ろうとする。もっと文字について学ぶまでは大人しく店を手伝うことにしよう。そう思って帰ろうとした誠は帰り道がわからなくなっていることに気がついた。

「ここどこだ？ さっぱりわからないぞ」

誠は辺りを見回すものの、似たような景色が続いているばかり。現代人の誠が中世風の建物の区別をつけることは難しい。彼は後先何も考えずに行動した自分を恨んだ。だが、そうして立ち止まっただけでもどうしようもない。なので、周りの人に道を聞こうとした。

「すみません、ちょっと道を教えてくれませんか？」

誠は通りを歩いていた人の良さそうな青年を呼び止めた。青年は誠の呼び止めに応じてその足を止めた。

「ありがとうございます。あの、ミラ雑貨というお店の場所を教え

てもらえませんか？」

青年は首を捻るとすまなさそうに答える。

「知らないなあ。ごめんね教えてあげられなくて」

「いえいえ、こちらこそ手間をかけてすみませんでした」

ミラの店は失礼だが、小さい店だ。知らない人が圧倒的に多いだろう。誠は地道に店を探すことにした。

少し歩いたところで誠は裏通りに入った。ミラの店が裏通りにあったことぐらいは覚えていたのである。そうして誠が裏通りを歩いていると、何ともステレオタイプなチンピラに遭遇した。太って腹の出た大男に、背の低い二人の三人組である。

「お前、誰に許可取って歩いてるんだ、ああん？」

「そつだここは兄貴の道だ。通りたかったら通行料払えや、こらあ！」

背の低い二人チンピラたちは古きよき昭和の香りを放ちながら手を出してきた。大男はそれを見て踏ん返り返りながら誠を睨みつける。しかしながら誠は文字通りの一文無し。お金なんて持つているはずがない。

「悪いけれど今手持ちが……」

誠は頭をかき、後ろに下がりながら答えた。その答えに当然、チンピラたちはキレる。

「なめとんのか！　ぶつ殺すぞてめえ！」

「持ってないですむかボケえ！」

背の低い二人のチンピラたちが殴りかかってきた。誠はそれがかわずと全力で逃げる。別に、今の誠ならチンピラに負けたりはない。しかし、殴って怪我をさせると後々因縁つけてきて面倒臭そうだから誠は逃げるのだ。

「そこまでよ！　悪党ども！　この正義の騎士アリス・キャンベラが成敗してくれる！」

誠の目の前の曲がり角から、痛々しいセリフを言い放つ少女が現れた。甲冑に身を包み、長い赤髪をなびかせる少女の姿は様になっ
てはいる。だが、何となくお寒い空気が辺りを漂ったのだった……。

第三話 商売を考えよう（後書き）

感想・評価お願いします。してくださると作者のやる気が上がります。

第四話 誠VS最強チンピラ（前書き）

今回はほぼギャグです。

第四話 誠VS最強チンピラ

「気をつける。モブでも強いやつはいる」

元異世界の騎士より

第四話 誠VS最強チンピラ

誠の目の前に現れた騎士アリス。彼女は剣を抜き放ち、一気にチンピラたちに斬りかかった。

「やべえ！ 兄貴」

「暴力反対」！

背の低い二人のチンピラは持っていたナイフを手放し、全速力で逃げ出した。そして大男の後ろに隠れる。大男はアリスの前に立ち塞がった。

「俺は強いぜ……」

大男は低く渋い声でアリスに言った。さらに後ろの二人が付け加える。

「兄貴は本当に強いんだぜ」

「ああ、兄貴はチンピラを超えたチンピラ、超チンピラなんだから

な……」

どこかの戦闘民族みたいだが所詮チンピラ。弱いだろつと誠は思った。誠がそんなチンピラたちに呆れている間に、アリスはかくよく宣言する。

「強かろうと弱かろうと関係ない！ 悪い奴らは倒すだけだ！」

アリスは剣先を大男に向けた。白銀の刃が陽光を反射し煌めく。大男はにやにや下品な笑いを浮かべていた。

「行くぞ！」

アリスが気迫と共に斬り込む。剣が真つすぐに放たれた。大男の目つきが一瞬にして変わる。大男は腹に向かってくる剣を無駄のない動きで回避した。アリスは必中と思った攻撃がかわされたことで体勢を崩した。大男はそんなアリスの背中に拳を放つ。

ドスンと鈍い音。それが辺りに響き渡った。アリスの身体が崩れ落ちる。

「兄貴〜！ さすがっす」

「やっぱ兄貴は最強でやんす！」

倒れたアリスを見て大喜びする子分たち。それを見て大男もまた大笑いする。

「さ〜て次はお前だ」

大男が誠を睨む。誠は一步後ずさった。そして逃げ道がないの

かキヨロキヨロと見回す。

「逃げようとしても無駄だぜ？」

大男が逃げようとする誠に告げる。誠はここにきてようやく怖いと思った。さっきまでチンピラごとき倒せると思っていた。しかしアリスを倒したそのあまりに意外な強さ。誠は大男に勝てるかどうか不安に思っていたのだ。

「チンピラのくせに強いなんていじめか！ でもこうなりやしかたない！」

誠は半ばやけになって大男に殴りかかる。フォームは無茶苦茶、隙だらけだ。しかしスピードは速い。大男は少しヒヤリとした。が、誠の拳を回避して、さらにがら空きとなっていた誠の腹を殴る。だが……

「い、痛てえー！ どんな身体してやがるんだ！」

突然鉄の塊を殴ったような激痛が大男の手を襲った。大男が見てみると紫色になり腫れ上がっている。それに対して誠の腹はどうにもなっていない。

「うわぁ……。本格的にどうかしてるぞ俺の身体」

誠自身も頑丈過ぎる己の身体に大いにビビる。そのため誠の動きがしばし止まった。

「あいつ強すぎるぜ。今のうちにずらかるぞ」

「へい兄貴！」

チンピラたちは誠が止まっているうちにしのび足で逃げ出していく。そしてあともう少して逃げられる距離まで来た。

「ちよつと待て！ 逃げるんじゃない！」

誠はチンピラたちが逃げ出していることに気がついた。そして呼び留める。チンピラたちはぎこちない動きで後ろを振り向いた。そして日本人もビックリの見事なまでの土下座を披露する。

「すみません、すみません、すみません……」

チンピラたちはエンドレスで謝り始めた。誠は怒る気も失せて戸惑う。

そうしているうちに後ろから少女の声がした。

「痛たた……おお！ 協力感謝するぞ」

アリスは誠が三人を平伏させているのを見て、腕に手錠のような物をかけた。そして、三人をどこかに連行しようとする。

「この礼はいつかするからな。君、名は何と言う？」

「誠です。あの、ちよつといいですか？」

「なんだ？ 言ってみなさい」

「実は……」

誠は自分が迷子であることを告げた。アリスは呆れたような顔をしながらも、店までの道を案内する。こうしてようやく誠はミラの店まで帰ったのだった。

「遅いなあ思ってたら騎士と一緒に帰ってくるやなんて……。私の想像を超えすぎやで！」

「まあまあ、そう怒るな。誠がいなかったら私は大変なことになっていた」

ミラの店の前。ミラが帰りの遅かった誠を怒るのを、アリスが上手くなだめようとしていた。だがそれは逆効果だったようだ。

「いや、だいたいあんたがチンピラなんかには負けること事態がありえんやろ！ 騎士やったらそんな連中ぐらいバシッと倒しや！」

ミラが強烈な言葉を放った。それを聞いたアリスの顔が曇る。そして地面にしゃがみ込んだ。

「そうだよな……。私が弱いからいけないんだよな……。それに私がイタいこともそもそもダメなんだよな……。」

アリスは地面に文字を書きながらつぶやき始める。怪しい雰囲気気があたりを漂う。

「あかん、呪われそうや。誠、店の奥へ行くで」

「ああ、祟られそうで怖すぎる」

誠とミラは店の奥へ引っ込んだ。店の前にはアリスだけが取り残された。アリスは一人つぶやき続ける。

これによってこの日の売上がほぼ無しになったことは言うまでもない……。

第四話 誠VS最強チンピラ（後書き）

感想・評価をお願いします！

第五話 力の使い道？（前書き）

かなり急展開です。

第五話 力の使い道？

「異世界は必ず不思議生物がいる。例えばポ モンとかスラムとか……」

異世界環境活動家より

第五話 力の使い道？

夜、誠が寝た後でミラは一人自室で考え事をしていた。誠のことについてだ。

「誠ってほんまに何者なんやろ。出稼ぎに来た村人って言うのは嘘だろうし……。あの力、人間かどうかすら怪しいで」

ミラは誠の嘘を見抜いていた。だが誠には助けてもらった恩があることと、誠が本当に困っている様子だったのでミラは誠を雇ったのだ。

「でも悪い奴ではなさそうやしなあ。そのうち話してくれるよな」

ミラはそういうと蝋燭を消し、眠りについた。

「誠、今日こそしっかり商売するでえ！ 昨日売れなかった分しっかり売らなあかんからな！」

ミラは気合いが入っていた。誠も昨日できなかった分気合いを入れる。

「よし、ミラ雑貨開店や！」

ミラは店の戸を押し開ける。そして開店中と書かれた看板を道に出した。

「誠、ウチは商品の整理してるからしつかり店番するんやで」

ミラはそういつて店の奥に引っ込んで行った。店のカウンターには誠だけが残される。しばらくして誠にとって初めての客が来た。紫色という地球じゃお目にかかれな髪色をした女性だ。女性はしばらく店内を見た後で小さな瓶を手にとった。そしてそれが気に入ったようでカウンターに持ってくる。

「この香水いくらかしら？」

「はいはい、少しお待ちを」

誠はミラに手渡されていた商品の値段表のページをめくり始めた。値段表には百近い商品の値段が書かれていた。なんでも屋のよくなミラの店は商品が多いのだ。しかし誠はすぐに目的の商品の値段を見つける。

「えーと三百ドランになります」

誠が値段を告げると女性はぶつぶつとつぶやく。そして誠に値段交渉をしてきた。

「三百ドラんだと食事に使っお金がなくなっちゃうわ。二百ならなんとかなるんだけど……」

女性は流し目で誠を見る。白いワンピースのような服の間から豊かな胸も顔を覗かせた。誠は頬を真っ赤に染めた。

「む、無理です。値下げはできません！」

誠はクラクラしながらも言い切る。それを聞いた女性は誠にしな垂れかかってきた。

「ねえ、お願いよー！安くしてくれたらいいことしてあ・げ・る」

誠は理性を総動員して誘惑を振り切ろうとする。もし、ここが誠の店だったら誠の理性は崩壊していたかもしれない。だが、ここはミラの店。誠の理性は女性の誘惑攻撃に見事耐え切った。

「ダ、ダメですよ。値下げはできない！」

「もうっ、つれないわねえ。はい、三百ドラんよ」

女性は金貨を懐から三枚取り出し、カウンターの上面においた。そしてそのまま歩き去っていく。

「とんだお客だったな……」

女性が去った後で誠はしみじみとつぶやいた。

その後、誠は順調に商売をこなした。お客が数人来たが、とくに問題はなかった。そして二時間ほどたったところでミラが店の奥

から出てきた。

「店番は大丈夫やったか？」

ミラは誠が心配だったのかすぐに話しかける。誠は苦笑しながら答えた。

「最初に変なお客が来たけど、他はなんとか大丈夫だった」

「そうか、それならよかったわあ。なら良い時間だしお昼にしようか」

ミラは店の看板を休憩中にとすると、また店の奥に入っていく。誠もそのあとについて行った。

「アメリカ神様、日々の糧を与えてくださることを感謝いたします」

ミラはそうお祈りして食事を取り始めた。誠もミラのスタイルに合わせて見よう見まねでお祈りしてから食べる。食卓の上には湯気を立てる料理が並べられていた。クロワッサンのようなパンを主食とする西洋風の食事だ。

「うーん、おいしい！ ミラは料理が上手いな」

誠はスープを飲みながら、ミラを褒めた。スープはブイヨンが効いていておいしいものだった。

「ふ、当たり前や。ずっと一人で暮らしてればこれくらいにはなる」

ミラは誠の賞賛に照れながらも胸を張る。そして満面の笑みを浮かべた。二人の間になごやかな時が流れる。

その後しばらくして、誠が食事の最後の一口を食べた。

「さあ、また仕事するでえ！」

「よし、また頑張るとしますか」

ミラと誠はそう言うつと食器を片付け、店へと戻る。そしてまた働き始めた。

午後からは結構な数のお客が来たが、誠は一人一人丁寧に接客をしていた。ミラはその間、帳簿をつけていた。そうしているうちにあっという間に夕方になった。

「そろそろ店じまいの時間や。今日はご苦労様」

ミラは帳簿を閉じてカウンターにしまう。そして笑いかけながら誠をねぎらった。ねぎらわれた誠の方もミラに笑みを返す。

「いやいやミラの方こそご苦労様だ」

誠はそういつて店の戸を閉めようとする。しかし、そこに一人の少女がやってきた。

「すみません！ ドラゴン、ドラゴンの爪の粉は売ってませんか！」

白いローブを着た小柄な少女は、その長い金髪をなびかせながら店に飛び込んできた。誠とミラは唖然としたがすぐに対応する。

「ドラゴンの爪の粉？ ちょっと待っててや、在庫があるかもしれない」

ミラは店の棚を勢い良く漁る。だが、しばらくしても肝心の商品は見つからない。

「あかん、そう言えば売り切れだったわ」

ミラは最近「ドラゴンの爪の粉」が売り切れていたことを思いだした。存在すら忘れかけていた商品だったので覚えていなかったのだ。

「そんなあ！ 困りますう！ ここでも売ってなかったらどこで買えばいいんですかあゝ！」

少女はあたふたと騒ぎ立て始める。棚にぶつかったり、商品を落としたりして大変だ。

「そんなに騒がんといてや！ほんとに一体どないしたん？」

「実は先生が魔法に失敗して……。と、とにかくドラゴンの爪の粉がいるんですう！ お金ならいくらでも払いますから！」

「でもなあ、あれは貴重な品だから……。金積まれても入荷はなかなかできないんや……」

そついうミラの言葉を聞いてなお少女はミラにお願いしてくる。そこでミラは誠を近くに呼んだ。そしてそつと耳打ちをする。

「誠、ドラゴンと戦う勇氣ある？ あの子相当困ってるようやし、魔法使いと繋がりができるのはチャンスなんや。古代種倒せゆわけやない、飛竜でいいから。お願い、頼む！」

ミラはそういつて誠に頼み込んだ。ミラは誠ならドラゴンを倒せると思ったのだ。

「そんなの無……でもないか」

誠はすぐに断ろうとしたが、自分の身体が恐ろしく強くなっていることを思い出した。今の身体ならなんとかなるかも知れない。そう思った誠は悩みに悩んだ末に引き受けることにする。

「わかった。俺がドラゴンを退治して目的の物を仕入れよう」

誠はこうしてファンタジーな生物、ドラゴンと戦うことになったのだ。

第五話 力の使い道？（後書き）

感想・評価お願いします。

第六話 ドラゴンマスター誕生？（前書き）

久しぶりの投稿です。最近忙しかったのでなかなか出来ませんでした。

第六話 ドラゴンマスター誕生？

「ドラゴンとの戦い。それは冒険の醍醐味である」

異世界冒険家より

第六話 ドラゴンマスター誕生？

ミラの店に謎の魔法使いが来た翌日、誠はドラゴンを倒すべく山に来ていた。

「このあたりか？ 何もいないが……」

誠は地図を見ていた顔を上げて、辺りを見回した。ドラゴンの巢があるはずだった。しかし辺りはゴツゴツとした岩場があるだけで、それらしき姿は見えない。誠はがっかりすると手頃な大きさの岩に腰掛け、休憩を始めた。そして慣れない山道に身体は疲れなくても精神的に疲れたのか、心地好い陽気の中で誠はウトウトする。

「ふうああ……っ ていかんいかん、こんなところで寝たらドラゴンに食われてしまう」

「その通りだぞ人間」

しばらくして誠が眠気を覚まして独り言を言うと、それに応える声がした。誠は後ろをソウツと振り向く。そこには赤い鱗に大きな口、そして巨大な牙を持つ生物がいた。

「ド、ドラゴオオオン！」

誠は叫びながら岩から降りるとファイティングポーズを取った。ちなみに誠は丸腰だ。誠の場合武器は逆に邪魔だろうと言ってミラが貸してくれなかったからである。

「おぬし丸腰か？ 舐めたものよ。古代竜ララスといえば昔は有名じゃったのだがのう」

ドラゴンは器用に人語で笑った。大きく開かれた口は誠など十人ぐらいまとめてひとのみにしてしまえそうだ。

「なんか予想してたより大物だ……」

誠はあまりにもスケールの大きな敵に圧倒されて腰が引けた。しかし今更逃げるに逃げられない。開き直って誠は戦う覚悟を決めた。そしてもう無我夢中でドラゴンの前足を殴りつける。

鈍い炸裂音がした。ドラゴンの鱗がひび割れ、血が噴出する。

「ウギヤアア！ 貴様何をした！」

ドラゴンは想定外の痛みに悲鳴を上げた。さらに誠に向かって殺気をぶつける。

「た、ただ殴っただけだ！」

誠はドラゴンの様子に恐れをなしながらもそう言いきった。実際にそうなのだから仕方ないのだが。

「馬鹿を言っな！ そんな程度で傷ついてたまるか」

ドラゴンはそう叫ぶと一段と殺気を強めた。そして鋭い爪を振り下ろす。誠はドラゴンの殺気に立ちすくんでしまっただけで動けなかった。

「な、何い！」

ドラゴンは驚愕した。自身の爪が誠の腕によって受け止められたからである。しかも、顔の前に突き出されたその腕は素人がとつさに出したもののようには見えない。素晴らしくありえないことだった。しかし、そのことに一番驚いたのは誰あろう誠であった。

「うおお！ 何だこりゃあ！」

誠は恐怖で閉じていた目を開けると驚きのあまり奇声を上げた。そして後ろに飛びのく。その時ついでにドラゴンの爪は弾き飛ばされ、ドラゴンは後ろに尻餅をついた。

「あ、ありえぬ。どうして人間にそんな力があるのだ。それもこんな覇気のない奴に……」

ドラゴンは恐れという感情を生まれて初めて覚えた。古代竜ラスと呼ばれる彼女は、ずっと最強の存在だった。それゆえに恐れなど感じたことはなかったのだ。でも彼女のどこかはかすかに期待を抱いてもいた。誠が自分を超える存在であることを。彼女は最強ゆえに孤独な存在だった。だから、自分を超える存在によって孤独から解放されたいとも感じていたのだ。

誠はラスにできた隙を見逃さなかった。誠はラスの腹にパンチを決める。その不格好なフォームから繰り出されたパンチは、見た目に反して凄まじい威力を発揮した。

「キシヤアア！」

ララスは咆哮を上げながら吹っ飛ばされた。数十メートルはあるうかという巨体が木の葉のように宙を舞う。そのあとでドシンとした揺れが辺りを襲った。

「今ならヤ　チャぐらい倒せるかも……」

誠は自分のしたことに半ば呆然としながらつぶやいた。誠からしたらずいぶん古いネタが入っていたのはきつと気にしてはいけない。

「もう怒った！　貴様など消しさってやる！」

ララスは砂埃の中から起き上がると悍ましいほどの叫びを上げた。さらに口を大きく開き、周囲の魔力を集め始める。ドラゴンの必殺技、プレス攻撃の準備だ。もしこの攻撃を破られたらララスに打つ手はない。その時は負けを認めてやろうと彼女は思った。もつともほとんどありえないことだろうが。

「これはちよつとやばくないか！」

誠はララスの口から溢れる青白い光を見てすぐに逃げ出した。だがもう遅い。ララスは高笑いしながら無慈悲にプレスを放った。しかし彼女の心のどこかで誠がプレスに耐えることを期待している部分がないでもなかったのだが。

「耐えられるものなら耐えてみるお〜！」

巨大な光の球が周囲の岩を薙ぎ払いながら一直線に誠目掛けて飛

んでいく。誠は精一杯走って逃げようとしたが、無駄に終わった。誠の身体を青白い光が飲み込む。

「ははは、このララスにやはり人間が勝てる訳がなかったのだ！ あーはっは」

えぐり取られた山肌。熱で溶けた巨大な岩の数々。それらを見てララスは自身の勝利を確信した。そしてご機嫌になったララスは悠々と巢のある方へと向かって行く。今日はやたらに強い人間勝ったことを祝ってご馳走でも食べようかと思いつながら。ただし、誠があつさりと倒れたことにララスは心の奥底ではほんのすこし失望感を感じていた。しかし彼女がそれを表に出すことはまずないだろう。彼女はそういう難しい性格をしていた。

そう思っていた時、彼女の耳に聞き覚えのある声がした。

「あちゃあちゃあちゃー！ 熱い！ 死ぬー！」

誠は溶岩と化した地面から起き上がるとその熱さに悲鳴を上げた。さらに彼は熱湯風呂に落とされた芸人のような動きをしながら溶けてないところまでたどり着くと、足をふうふうする。

「……あはははは、負けた、負けたぞ人間よ。よし、こうなったらそなたを主として認めてやろう」

ララスは誠の様子を見て大笑いすると、そう言い放った。ドラゴンは何よりも力を尊ぶ種族だ。ララスが勝者の誠に仕えることを申し出たのはそれほど奇妙なことではない。さらに彼女自身が誠が大騒ぎしているのを見て、彼を純粹に面白い奴だとも思ったことも関係している。

しかし、それを聞いた誠は困ったような顔をした。

「うーん、うちには君を飼えるようなスペースはないなあ……。それに食費も掛かりそうだし」

誠は何とも所帯じみたことを言った。もちろん誠もドラゴンに乗れたら格好良いな、とかは思っている。だが実際に飼うとなると問題が山積みだろうと誠は思ったのだ。それを聞いたララスは一層腹を抱えて笑った。

「ぶ、ぶはは、小さなことを気にする奴だ。良からう、これなら問題あるまい」

ララスはそう言つとぶつぶつと呪文を唱えた。やがてその巨大な身体を光が包む。

「よろしく頼むぞ主殿！」

光が収まると、そこには妙齡な女性の姿になったララスがいた……。

第六話 ドラゴンマスター誕生？（後書き）

感想・評価をお待ちしております！

第七話 増える仲間とミラの頭痛

「異世界では毎日がトラブルだ。いついかなる時も冷静に」

異世界経験者より

第七話 増える仲間とミラの頭痛

誠は目の前に現れた美女に困惑していた。

「え、君は？」

誠は辺りを見回しながら女に尋ねる。女は少し不機嫌になった。

「何を言っている。私はララスだぞ」

「や、やっぱり……」

誠はがっくしきたようにつぶやくと、何かに気づいたのかララスから目を逸らす。

「ふ、服を着てくれ！」

誠の要請にララスは怪訝な顔をした。

「それを言うなら主だって裸ではないか」

誠は自身の身体を見た。誠の身体にはわずかに”服だったものがへばり付いているだけだった。誠の顔がどんどん赤くなっていく。

「ぎゃあああゝゝ!」

誠の魂の叫びが山に響いた。

「誠……この子は誰や?」

ミラの店の前にぼろきれを着た誠とララスが立っていた。ミラは疑わしげな目でララスを見ている。

「これにはそれなりに深い訳があつてね……」

誠はたどたどしい様子で説明をした。ミラは頭を押さえながらも誠の説明に聴き入る。

「誠はどれだけ規格外なんや……。はあ、あかんちよつと頭痛い」

ミラは棚から瓶を取り出すと、中の液体を一气飲みする。

そして、風呂上がりのオッサンのようにプハーっと言うと疲れた顔で誠を見た。

「びつくりしたけどまあええで。家族が多いのは楽しいから」

ミラはそういうとききほどから店の入口で突っ立っていたララスの前に立った。そして手をララスに向かって差し出す。

「私はミラ、よろしくな」

「ふん、私は主以外の人間になど興味はない」

ララスはそっけなくミラの手を払い除ける。ミラは頭から湯気を出して怒る。

「こらっ、なにするんや！　これから一緒に住むことになるんやで頼むから仲良くしてな」

「私は主には従うがそれ以外の人間と馴れ合うつもりはない」

「な、なんやてえ〜！」

ミラはララスのふてぶてし態度にいよいよ怒りに火がついた。拳を握りしめ、息を荒くする。

「ラ、ララス！　ミラにそんなこと言ったらダメだろ！」

今にも爆発しそうなミラを見て、たまらず誠が二人の間に割って入った。二人はすごすごと離れる。

「仕方ない。主が言うなら付き合おうでしょう」

ララスはしぶしぶといった様子でミラに手を差し出す。ミラはやたらとニコニコしながらその手を握った。ただミラの目には赤々と炎が燃えている。

「よろしくな？　一応」

ミラはララスの目を表面的にはにこやかに見た。二人の視線が空中でぶつかり合う。見えない火花が飛び散る。

「そういえばミラ、ドラゴンの爪の粉は用意できたからあの魔法使いさんに届けないと」

誠は険悪な雰囲気をばらまいている二人を何とか引き離そうとした。ミラはそれを知ってか知らずか素直に誠の思惑通りに荷物を届けに出掛けることにする。

「せやな。なら粉を頂戴。ウチが届けて来るわ」

誠は小さな瓶をミラに手渡した。ミラはそれを手にすると店から飛び出していく。ミラが見えなくなったところで誠はララスに説教をした。

「ふう、ララス、もっとミラと仲良くしなきゃダメだぞ。何である横暴な態度を取るんだ。もっと優しくできないのか」

「私は古代竜だ。その私にとって主以外の人間などどうでもいい。私がお仕えするのは主だけ、優しくするのも主だけなんだ」

誠はララスの言葉にうれしいような恥ずかしいような感情を抱きながらも、これではダメだと気持ちを入れ替える。

「他の人間とも仲良くしてくれ。それができなければ街では生きていけないぞ」

「うつむ……。前向きに検討しよう」

ララスはそういってお茶を濁した。誠は少しずつ変えて行くしかないかと、ララスの意識改革を諦めてミラを待つことにする。しばらくして店にミラが帰ってきた。何か良いことでもあったのかホクホク顔だ。

「ただいま」。ドラゴンの爪の粉、凄い値段で買い取ってくれたで！あと、後日誠に直にお礼がしたいから店に来るそうや。楽しみにしときい」

よっぽど高値で売り付けたのか幸せそうな顔をするミラ。しかし、誠はその様子に微妙な恐怖を感じた。ちなみに魔法使いの女の子が財布が空になって泣きそうになったのはミラだけの秘密だ。

「さあて、今日はララスの歓迎会も兼ねてたくさん飲むで」

ミラは夕日が差し込む店の中の整頓をすると、早めに店じまいした。そして二階に上がって宴会の準備に取り掛かる。

「よし、今日は腕によりをかけるでえ」

ミラがそう言って台所に籠る。しばらくすると良いにおいがしてきた。誠とララスもおいにつられて台所に行き、ミラを手伝う。またしばらくすると、湯気とともにたくさんの料理が出来上がった。

「いただきます！」

テーブルに並べられた料理を前に、誠は以前からの習慣に従って挨拶をした。それを聞いたミラが誠にワインをなみなみと注ぐ。さらにミラはララスのグラスの方にもたっぴりとワインを入れる。

「誠もララスもたくさん食べて飲んでや。今夜は祝いなんやから！」

ミラは上機嫌でワインを飲む。そしてその宴会は深夜まで続いた。

こうしてまた仲間が増えたりしたが、誠は何とか一日を無事に過ごせたのだった……。

第七話 増える仲間とミラの頭痛（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第八話 アール騎士団ただいま参上！（前書き）

改めて言いますと、この小説は基本的にコメディーです

第八話 アール騎士団ただいま参上！

「異世界には我々には理解できない変わった人が多い」

異世界探検家のレポートより

第八話 アール騎士団ただいま参上！

誠とララスの戦いから数日後。今日も誠は店番をしていた。ミラは仕入れに出かけ、ララスは奥で品物を整理しているので店先には彼一人だ。

「うーん、やっぱり異常はないな。どうなってんだか」

誠は客がないのを良いことに、マニュアルに書かれていた『自分で出来るメディカルチェック』を実践していた。誠は自身の身体の変化に不安を感じていたのだ。しかし、どうやらそれは杞憂だったらしい。

「まあ良いか。悪いことは今のところ起きてないしな」

誠は考え込むことを止めて、マニュアルを閉じる。そして今度は茶色の厚い本を取り出した。誠はパラパラとページを開くと、本に書かれている単語を音読する。その本の表紙には『初歩から始める単語集』と書かれていた。

「イルト、イルト……」

自らに備わった中途半端な言語翻訳能力を恨みながら、誠は単

語を読み上げていく。すると、集中している誠に誰かが声を掛けた。

「おーい、誠！ アリスだ、返事をしてくれ」

「ああアリスさん。何か買いにきたんですか」

誠が顔を上げてみると、アリスが見慣れない二人の男を連れて道に立っていた。誠はその様子を見て、アリスたちを店に招き入れる。

「最近変わった噂を聞いたのでな。何でも誠が古代竜を倒したとかいう内容の。……まさか本当に倒したりはしてないよな？」

アリスはどこから聞き付けたのかそう尋ねてきた。噂が伝わるのはどこの世界でも早いらしい。

「いえ……本当に倒しちゃいました」

誠は凄い形相で尋ねてきたアリスに申し訳ないかのように答えた。

きつとアリスも引くんだろうな……。誠が漠然とそう思っていると、アリスは誠の予想を裏切り、満面の笑みを浮かべた。

「そうか！ なら誠、まだ骨とか鱗は売ってないよな？」

「売ってないといえば売ってないですが……」

売るも何もない。竜自体を仲間にしたんだから。だが誠がそんなことを言うはずがない。

「良かった！　ならその素材を売ってくれないか。古代竜の素材を使った剣を持つのは私たち武人の夢なんだ！」

「そ、それが……」

「どうした、まさかないのか……？」

アリスは顔を俯け、肩をすくめる。その表情は愁いに満ちていた。

「え、うぬ、ああと……ところでそこにいる二人は誰なんですか？」

誠はアリスの負のオーラに溢れた姿を見て、そんな物はないとも言えず、無理に話題を逸らす。

「二人のことか？　何、私の部下だ」

「部下がいたんですか……」

どこかでアリスのことを下っ端だと思っていた誠。それだけになかなか意外な事実だった。しかしアリスはさらに衝撃的なことを口走る。

「私はこの街の騎士団長だから部下ぐらいいて当然だ」

アリスがそう言った途端、誠の時が止まった。そして誠はコマ送りのようにぎこちない動きで口を開く。

「な……なんだとおおー！」

誠の渾身の雄叫びが街にこだまする。道行く人々はみな一斉に誠たちの方に注目した。

「いきなり叫ぶな！ 私まで恥ずかしいだろう！」

「いや、アリスさんが団長ってありえないでしょ！ イタいし弱いし、性格後ろ向きだし！」

誠は興奮のあまりアリスに対して思っていることをすべてぶちまける。するとアリスは紫と黒の混じりあったような雰囲気を放ち始めた。

「わ、私はそんな風に思われていたのか……」

アリスは地面にしゃがみ込み、つぶやきながら文字を書き始めた。周囲の人々はそれを目にとると、見てはいけないものを見てしまったかのように視線を逸らして逃げて行く。その様子にアリスの後ろに控えていた騎士が頭から湯気を出して怒る。

「貴様あ！ 団長はガラスの心を持っているんだぞ！ 発言には気をつける」

「確かに悪かったですが、ガラスの心って……騎士なら精神的にも強くなりましょうよ」

「だまらっしゃい！ ヘンリー、こいつを駐屯所まで連行するぞ！」

男は誠の手に縄を掛け、連れて行こうとした。しかしそれをもう一人の男が止める。

「副団長、こいつは古代竜を倒したらしい猛者であります！ 全員揃わないと勝てないかと！」

「うつむ、それもそうだ。おい、貴様。我々はすぐに戻ってくるからな。逃げるなよ！」

男たちはそういうとどこかに向かって走り去って行った。何故が一番大事なずのアリスを残して。

「どうした主よ。先程から騒々しいが」

店の奥から騒ぎに気づいたララスが出てきた。だが次の瞬間、彼女の目が驚愕によって限界まで見開かれる。

「そやつは何者だ。その負のオーラ、さては魔王か！」

「ただの人間だよ。性格が後ろ向きなだけで。あっそうだララス、この人を店の奥に入れてくれないか？ ここにいられたら商売の邪魔になっちゃうから」

誠は盛大な勘違いをしているララスに説明をすると、アリスを店の奥に引っ張って行ってもらった。

「ふう、疲れた」

誠は椅子に深く腰を沈めると、一息ついた。そうして穏やかな時を過ごす。だがそれはすぐに終了させられた。

「そこまでだクロサキ マコト！ 我らアール騎士団が天に代わっ

て貴様を討つ！ トウウツ！」

いつのまにかお向かいの家の屋根にいた男たちが、そう高らかに叫ぶと道路に向かってジャンプした。さらに男たちが着地すると同時に、屋根から煙りが上がって紙吹雪があたりに舞い落ちる。

「さあ我らの正義の力を思い知れ！ 総員突撃だあ！」

「え、あ、ちよっ！」

こうして誠はアール騎士団となぜか戦うことになったのだった……。

第八話 アール騎士団ただいま参上！（後書き）

感想・評価をお願いします！

第九話 騎士とネタ（前書き）

タイトル通り、ネタばかりです。わからない方は面白くないかも……。

第九話 騎士とネタ

「異世界でも人はネタなしでは生きられないらしい」

異世界研究家より

第九話 騎士とネタ

「ふふ、もう逃れられはせんぞ!」

誠は騎士に取り囲まれていた。五人の騎士たちがガツチリとガードしていて彼に逃げ場はない。しかしそんな誠の顔には恐怖というよりむしろ呆れの感情が浮かんでいた。

「すみません、今俺店番中なんです。後で来て下さい。店の営業の邪魔です」

「な……何だと。な、舐めおつて。お前はこのアール騎士団スペシャル・バトル・フォーメーションが怖くはないのか!」

「スペシャル・バトル・フォーメーションって普通に取り囲んでるだけじゃん!」

……確かに、五人の騎士は普通に武器を構えて誠の周りに立っているようにしか見えなかった。しかし、彼ら騎士の中ではそうじゃないらしい。

「貴様の目はふしあなのようだな。毎朝一時間の猛練習の成果が分からんようだ……」

「もつとまともなことに時間を使えよ！」

誠がそう言った途端、騎士たちの目の色が変わった。そして不気味に沈黙する。

「……やはり貴様と私たちは相容れない存在のようだ……。ヘンリー、こいつを消せ！」

「ははっ副団長！」

先程、店にきていた男が一步前に出てきた。背の高い優男で、漫画とかに出てきたら間違いなくヤラレ役といった感じの男だ。

「ふふ、僕の二つ名は『前方不敗』だ。君に勝てる見込みはないよ！」

ヘンリーが誠に斬り掛かった。彼の剣の残像が無数に見え、誠の動体視力を持ってしてもその本体を捕らえられないほどだ。誠は剣を避けることをあきらめ、その頑丈極まりない体で受け止める。

「はは、君はその程度かい、ひゃっはああ〜！」

テンションがおかしなことになっているヘンリーは、奇声を上げながら誠を文字通り目にも止まらぬ速さで切り刻む。そうしていると誠が大変なことに気がついた。

「俺が大丈夫でも服が！」

このままでは裸にされてしまう！　そう危機感を募らせた誠はなんとか攻撃から逃れようと横に移動した。すると、あっさりと攻撃から逃れられた。それを見たヘンリーは慌てて『力二歩き』で移動して、誠のいる位置を再び正面にとらえる。

「まさか『前方不敗』って真正面にしか攻撃できないとかじゃないよな？」

「そ、そんな訳ないだろう？　な、何を言っているんだ」

今までのテンションはどこへ行ったのか、ガクガクと震えながらヘンリーは言った。あまりにもあからさまな様子だ。

「それならっ！」

「やめろ、よせ！」

誠は右へ左へとちょこまかと動き出した。ヘンリーは力二歩きで必死に追いかけるものの追いつけない。やがて疲れた彼は足を絡めて倒れてしまった。

「……勝ちかな？」

「くそっ、もつと修行して『前方後方側面不敗』になっておけば良かった……ぐはぁ」

倒れた時の打ちどころが悪かったのかそのまま意識を手放したヘンリー。その様子に誠が微妙な顔をしていると、騎士の一人がそれ

を背負ってどこかへ消えていった。そしてしばらくしてから戻ってきた。

「やはりヘンリーには無理でしたな。副団長、私にお任せを」

「うむ、任せたぞ」

戻ってきた騎士は副団長に確認を取ると、誠に向かって何故か日本刀を構えた。誠は何故日本刀なのかと不思議に思ったが、ろくな理由はなさそうなので気にしないことにした。

「私はゴーエ。ヘンリーとは一味も二味も違うぞ。貴様などこの『斬鋼剣』の錆にしてくれる！」

ゴーエは刀を抜き放った。荒々しい刃紋が黒鉄の刀身に表れた見事な刀だ。ゴーエはそれを大袈裟に振りかぶり、上段の構えを取る。刀が陽光を纏い、鮮やかに煌めき、ゴーエの身体から圧迫感が放射される。その風格たるやまさに強者。

しかし、誠がここで言うてはならぬことを言った。

「今なんとなくネタが読めたんですけど。まさかその刀、鋼しか斬れないとかじゃありませんよね？」

ゴーエが氷になった。そして数分たつてようやく溶けたのか、口だけを小さく動かして言葉を発する。

「……貴様を斬るのはやめておこつ。またつまらぬ物を斬りたくはない……」

ゴーエはそう言い残し、哀愁を漂わせながら明後日の方向へと去

つていった。誠はなんとなく手を振ってそれを見送る。

「お、おのれ我が騎士を二人も……よし balan、お前が奴を倒すのだ！」

副団長が小柄な騎士を指差して命令した。するとその小柄な騎士は突然腹を抱えて道路を転げ回る。

「副団長、私は急性盲腸になったので戦えません！ くそ、腹さえ痛くなければあんな奴、簡単に倒せるのに！」

「何たることだ……。後で医者に見せてやるからな。ならばルイス、お前がやれ」

誠の目にはどう見ても仮病に見えるのだが、副団長にはそう見えないらしい。彼は balan が戦えないと判断すると、ルイスというもう一人の騎士に戦うように指示した。するとルイスが頭を抱えて膝をついた。

「も、申し訳ありません。私はたった今脳内出血を起こしたようで……。チクシヨ〜頭さえ痛くなければ〜」

後半棒読みでルイスがそういうと、副団長は啞然して固まる。そして突然、高らかに狂気を孕んだ笑い声を出し始めた。

「こうなったら仕方がない。私自らが戦おう。言っておくが私は強いぞ？ 貴様は死ぬかもしれん。そうだ、今から三分間だけ待ってやる！ その間にアリス団長に千回謝ったら許してやらんでもない」

「三分間で千回謝るのは無理だ」

「ならば交渉決裂だ！　アール騎士団副団長ライハルト・ローレンス、推して参る！」

いつのまにか黄昏れに染まっていた街の中で、男たちの戦いが始まった。

第九話 騎士とネタ（後書き）

感想・評価をお待ちします。

ひとまず更新停止のお知らせ（前書き）

重要なお知らせですのでご覧ください。

ひとまず更新停止のお知らせ

このたびなのですが、この小説をひとまず打ち切りにすることを決めました。

気分が乗らずほかの小説が増えてしまい、そちらがメインとなってしまうからです。

ですのでそちらが片付くまでこちらのほうを更新停止とさせていただきます。

楽しみにしてくださっていた読者の皆様には申し訳ありませんが、ご了承のほどなにとぞお願いします。

#####

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8517n/>

異世界対応マニュアル！

2011年5月31日11時08分発行